コロナ禍に想う　休校　今昔

氏家　雅子（教育：昭和４８年卒）

昭和４４年４月入学式。実は、２度目の入学式である。一人暮らしへの憧れもあり、県外の大学へ進学した、はずだった。しかし、そこで、まだそんなに親しくもない先輩方から「講師・男子・香大」の時代、地元での就職を希望するなら絶対香大に進むべきだと熱心に諭され、香大の入学式の前日、式服だけを手に夜汽車に飛び乗った。夜中に玄関に立った私を父は黙って迎え入れてくれた。

当時は大学闘争の真っただ中。外塀には独特の文字で「安保反対・ベトナム反戦・沖縄返還」等と書かれた立看、ピケ、学生会館前でのアジ、１０番教室での学生集会、事務局への立てこもり、スト・・・。

そんな中で私の大学生活は始まった。たいした目標を持って入学したわけではないにしても、何か月もの間授業らしい授業もない日々。これまでは与えられたことにただ真面目に向かい小さな目標を達成していけば良かったが、大学では時間割編成１つにしても自分で学びたいことを選択しなければならない。大海に放り出されたような試練と不安を初めて感じた。入学式で学長が大学とは与えられる場でなく，自ら探求する場とおしゃっていた。果たして、４年間の大学生活で得たものとは何であったのだろうか？

今、コロナ禍で３か月にもわたり休校が続いている。近くに住む小学生の孫たちが毎日我が家に登校してくる。外出もままならず、友だちとも会えない閉ざされた日々。３８年間教職にあったが、これ程学校の存在意義を感じたことはない。学校での社会生活の中での様々な体験や友だちとの学び合いの場を通して、子どもたちは社会性や協調性や相手を思う心や自分を客観視する力を学び成長していく。目の前の子どもたちを見ていると成長が止まっているのではないかとさえ思える。たとえ、この先オンライン授業が普及しても学校本来の目的は果たせるとは思えない。

そんな中にもささやかな喜びもあった。両親が共働きのため、幼いころから保育所通いの孫たちにとって兄妹でこれ程長時間一緒に過ごすこともなかったと思う。しかし、外出した互いの帰りを待ちわびる様子を見るにつけ、互いをどれだけ大切な存在であったかを知り、絆を深め合ったようである。

コロナにより借金が更に膨れ上がった日本。果たして、この子たちに明るいい未来は待っているのであろうか？